

## 屏風絵「枝垂桜」「咲き椿」「散り椿」

—三宅家所蔵の屏風に描画—

屏風絵制作：三 榊 正 典\*

(2020年1月7日 受理)

Picture of a Folding Screen “Weeping Cherry Tree”  
“Blooms Camellia” “Scattered Camellia”

—Paint Pictures on the Screen of the Miyake Dwelling House Storehouse—

Masanori MIMASU\*



---

\* 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科教授

三宅家住宅

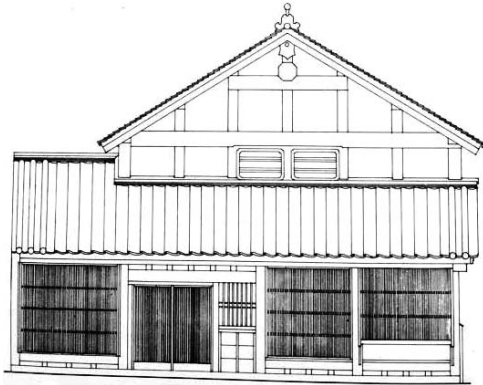


図1 三宅家立面図



図2 三宅家蔵

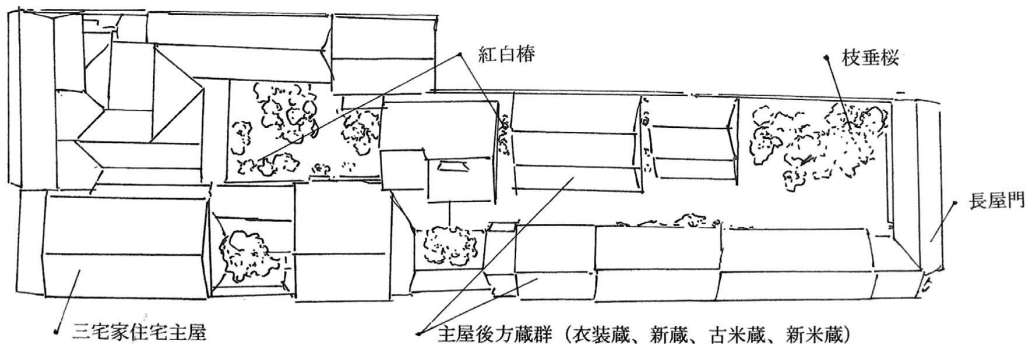


図3 三宅家住宅平面図

海田町稲荷町に国の登録有形文化財（建造物）として登録されている三宅家住宅がある。三宅家住宅は、江戸後期に建てられたもので、旧山陽道（西国街道）沿いの水陸の塩業を中心とした中継商業で栄えた海田町の歴史のシンボルとして今に伝えている。三宅家住宅は、所々に漆喰で塗り固めた江戸時代宿場町の面影を残している。切妻造りの主屋後方には、衣装蔵、新蔵、古米蔵、新米蔵と大きな4つの蔵を有しており、当時使用していた農耕具や武具、衣装、食器をはじめ屏風や掛け軸など数多くの貴重な文化財が保管されている。

当主の三宅栄一郎さんより、蔵に無地の古い屏風があり、それに絵を描いて欲しいとの依頼があった。三宅家住宅は一昨年襖絵を描かせて頂いた千葉家住宅とともに海田に残る数少ない町家遺構の一つで、その蔵に所蔵されていた屏風に不思議な縁を感じ、快く引き受けさせていただいた。

提供していただいた無地の屏風は8曲半双（1扇：45×172 mm）と6曲1双（1扇：49×125.5 mm）屏風は明治時代に作られたものと思われ、紙もかなり傷んでいるようであった。まずは、比較的傷みの少ない8曲半双の屏風を選び、描くこととした。

描く題材に選んだのは、三宅家長屋門に入って右手に咲いている「枝垂桜」。隣接する千葉家の庭のシンボルの「山桜」の襖絵を2016年に描かせていただいたが、その作品と対比させる意味も込めてみた。続いて描いたのが6曲1双。題材は「紅白椿」。当主の三宅栄一郎さんが、最も好きな花で、庭の



図4 三宅家 垂れ桜



図5 千葉家 山桜

至る所に紅白の椿が植えてある。左右対を成す1双の屏風にそれぞれ紅椿と白椿を分け、時の流れを表現してみた。

## 屏風について

屏風は、「風をふせぐ」「風をしりぞける」という言葉に語源があるように、古くから部屋の仕切りや装飾に用いる家具であり、木の枠に小さなふすまのようなものを数枚つなぎ合わせて、折りたためるようにした表具である。岡本（2007）は、屏風の実用性と装飾性について以下のように述べている。

屏風は古くから実用的な調度として、また絵画などの芸術作品および装飾芸術の表現形式として発達してきました。そして、屏風は用途によって大きく防風用・防寒用・間仕切用・儀式用・背障用・道具用といった実用的なもの、純粋な装飾用のものに類別することができます。屏風や襖は、このような実用の具と工芸品の両方の正確を伝統的に持っていました。とくに屏風に関していえば、一つの屏風に実用と装飾の両用性があることが普通でした。さらに襖に比して屏風の特殊なところは、可動式でしかも設置場所に制約のない間仕切りであり、より工芸品であるという点です。なお、近世に至り屏風によっては建具に近いもの、あるいは純粋な工芸品にちかいものというように屏風の性格に偏りが生じてはいます<sup>1)</sup>。

三宅さんから依頼された屏風は、明治期に作られたと思われる無地のもの。上記のように古い屏風については、実用と装飾の両面性をもっていたものが多く、無地の屏風と出会えるのは稀であった。8曲半双の屏風には「間合紙」が貼られており、後に金銀箔が貼られる予定と考えられるがいずれにせよ実用を主として残された屏風と考えられた。長い時を経て受け継いできた当主達の願いでもあるかのように、その屏風に絵を描くという装飾性を加えることとなった。依頼された屏風は長い間蔵に所蔵されていたためか、蔵から出したとたん紙に亀裂が入り始めた。幸い大きな損傷の多くは裏貼紙で本紙には影響は少なかった。しかしながら、本紙も経年劣化していて、描き進めると裏貼紙同様の大きな亀裂が入ることが考えられた。そこで、今回の画材は従来のアクリル画材を使って塗り重ねることを避け、紙への負担を出来るだけかけない墨を使った墨彩表現を試みることにした。

### 枝垂桜（8曲半双屏風）

8扇の左手から右手に流れるように、三宅住宅後方の中庭に向かっていく様を描いた。

貼っている紙は「間似合紙」と呼ばれる、主に金銀拍を貼る下地として使われている紙である。久米（2003）は、間似合紙について以下のように解説している。

ほかの紙が帖あるいは束単位であるのに枚単位で記されているほどで、高価な紙であったことがわかる。土粉を混ぜてつくるのが特徴であり、土粉を加えることで色がつき、土鳥子とも呼ばれる。これにより虫害を防ぐ、耐熱性がでる、伸縮が少ない、変色を防ぐなどの長所が生まれる。この耐熱性を活用して金銀拍打紙もつくっている。（中略）横幅をからかみに寸法に合わせて幅三尺（半間）に合うようにつくられたので、間似合紙と呼ばれる<sup>2)</sup>。

当初は、表具の痛みが激しいために紙も貼り替えて描く予定であったが、間似合紙が貼られていることによって紙自体は傷みが少なく、経年変色はあるものの土粉による独特の色合いも醸し出されていて、その色合いを余白に取り入れる構成で枝を墨を使った墨彩で、花はアクリルで重色を避け、即興で描き進めた。近い枝は線描で遠い枝は点描で描き、遠近の様を表現してみた。



図6 枝垂桜 上：下絵～技法 下：作品



### 紅白椿（6曲1双屏風）

8曲半双の屏風に直接墨とアクリル絵の具を使って枝垂桜を描いた後、提供された残りの6曲1双の屏風に取り掛かった。貼ってある紙は、8曲の屏風とは全く異なり、経年劣化も激しくいたるところに亀裂が入っていた。しかしながら、経年ならではの色合も間似合紙と同様に味わい深いものを感じたので、より余白を多く取り入れた画面になるような構成を試みることにした。

題材に選んだのは、三宅さんが最も好んでいる「椿」。庭の色々な場所にも植えられている。1双の屏風は、対を成している構成で、尾形光琳の「紅白倍図屏風」や酒井抱一の「夏秋草木図屏風」のように対照的な物語性を演出している場合が多い。

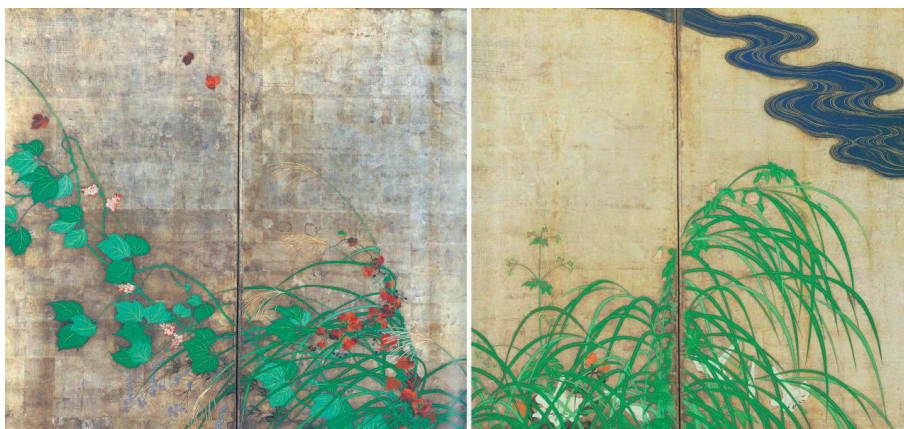


図7 酒井抱一「夏秋草木図屏風」

椿についてもその一双屏風の物語性に着目し、左隻を紅椿、右隻を白椿として配し、時間の経過を表すように紅椿は正に咲き誇っている「咲き椿」白椿は今にも散りゆく様を表すように「散椿」とした。それは、人の一生の栄枯盛衰とも重ねてみた。小泉（2007）は椿の物語性を神秘性と捉え、以下のように述べている。

時代とともに人間の意識というものは変わってゆくけれども、その意識のずっと奥底に眠る無意識の領域には、時代を越える何か息づいていると考えられるから、ひょっとすると“椿好き”になることは、ただだんに様々なかたちの花を愛でるだけでなく、こういった現代人が忘れてしまった人間の深い情念に触れる機会となるのかもしれないし、さらには、それぞれの作家がそれぞれの思いの上で描いていった椿の絵を見ることは、その機会をさらに増すことになるだろうときたいしてもよいのかもしれない<sup>3)</sup>。

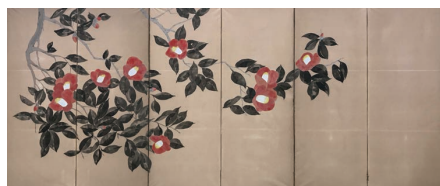


図8 咲き椿



図9 散椿

三宅家所蔵3隻の無地の屏風は、長い年月を物語るように経年劣化した様を現代に残し、その歴史と融合させるように古くから描かれている墨彩と現代の画材であるアクリル絵の具を混合させて描いた。少しでも描く水の量が増えるとたちまち紙に亀裂が入ってしまうというぎりぎりの緊張感の中、屏風の持っていた経年の味わいを残しながら無事描画活動を終えることができた。8曲半双（1隻）の屏風は、間似合紙の現状がかなり良いために（現代の紙を使って）裏紙を修復したが、6曲1双（2隻）の屏風は、あまりにも痛みが激しいために修復が困難で、描き終わった段階の状態で作成とした。何よりも喜んでくれたのは、当主の三宅栄一郎さん。屏風は少しでも多くの人に見てもらいたいという希望で、海田町に寄贈された。その後屏風は県の重要文化財である旧千葉家住居を舞台に四季折々展示して頂き、季節の彩と共に鑑賞して頂ける機会を得ている。屏風に絵を描くことによって、実用性に装飾性が新たに加わり、正に歴史的建造物と現代アートの融合を現実化させることが出来た実践となった。

貴重な屏風を提供して頂いた三宅さん、作品の管理・保管・企画展示を引き継いで頂いた海田町、そして屏風修復の支援をして頂いた広島女学院大学にこの場をお借りして感謝の気持ちを記したい。



図10 旧千葉家住居での展示風景

## 引用文献

- 1) 岡本吉隆 『表具の瀬計と表具地の用法』 三晃社 p.198 2007
- 2) 久米康生 『すぐわかる和紙の見分け方』 東京美術 pp.30-31 2003
- 3) 小泉淳一 『春を告げる花―椿絵名作展』 茨城県天心記念五浦美術館 p.101 2007

## 引用図版

図1 海田町教育委員会 『海田町の近世建築調査報告書』 p.22 1985

## 参考文献

- 山本 元 『裱具の栞』 芸艸堂 1984
- 山下裕二・高岸 輝監修 『日本美術史』 美術出版社 2014
- 山川 武編集 『琳派 光悦／宗達／光琳』 学習研究社 1979
- 濱中信治・浅見千里 『日本人の心の花 椿絵名作展』 便利堂 2004
- 三榭正典 『日本の伝統文化と現代アートの融合～ジャパニーズ・モダンの創造』 三晃書房 2016